

## 「元 BC 級戦犯・李鶴来氏のご逝去」

2021 年 04 月 07 日

日本の戦争責任に関しては、東京裁判で A 級戦犯とされた人々が裁かれ、7 人が絞首刑になった。また、アジアの各地で、BC 級戦犯とされた人々が裁かれ、千人ほどが死刑判決を受けている。彼らの全てに死刑が執行されたのではないが、BC 級裁判は、正規の裁判とは言えない、人民裁判のようなものがあり、無念の中で命を奪われた人がいる。刑死された 692 人の遺書を集め、『世紀の遺書』が出版されている。涙なしには読めない苦悶が綴られている。彼らは、死刑になることの意味を求めてもがいている。日本人の場合、「小生は贖罪自決の心算りにて最後の場に臨むべく、見苦しからぬ最後を遂げたく念願致居候」と、日本の侵略戦争の贖罪として死を受容した人もおられる。しかし、軍属として徴用された朝鮮人の怒り、悲しみは底知れない。身近に、死刑執行の音を聞きながら、恐怖に震えて、自らの執行を待つ人の声も残されている。

在日韓国人元 BC 級戦犯の李鶴来氏が、先月、96 歳の生涯を終えられたというニュースが報道された。彼は日本支配下の朝鮮で生まれ、17 歳の時、日本軍の捕虜監視員としてタイに渡った。当時、朝鮮や台湾の青年を動員し、約 3 千人がアジアの戦場に送られた。彼らは戦闘員ではなく、捕虜監視員として働かせられた。李氏は、捕虜に過酷な労働を強い、泰緬鉄道の建設現場に配属され、彼らの労働監視に当たった。2 年の契約が過ぎても帰してもらえず、敗戦を迎えた。彼を待っていたのは、連合国による戦犯法廷で、捕虜虐待の罪で死刑判決を言い渡された。8 ヶ月、シンガポールの刑務所で死刑囚として過ごした後、減刑され、1951 年に東京の巣鴨プリズンに移された。翌 1952 年にサンフランシスコ条約が締結され、日本は国際社会に復帰した。この時、李氏ら朝鮮半島出身者たちは日本国籍を失った。日本人として捕虜虐待の罪を裁かれながら、「外国人」と見なされて日本政府の保護から排除された。日本人の元軍人・軍属には恩給や遺族年金が支給されたが、李氏などは、それらの恩恵を受けることができなかった。李氏らは差別的な扱いを許せず、「韓国出身戦犯者・同進会」を設立し、早期釈放、差別待遇の廃止、出所後の生活保障、同胞の遺骨送還など、日本政府に謝罪と補償を求めた。1954 年に釈放されるが、日本に協力し民族を裏切った「親日派」と見られるのを恐れ、帰国を断念した。彼らは、日本からも排除され、故国にも帰れない悲劇を味わった。居場所を喪失したのである。

捕虜収容所では、日本人の上官に従うしかなかった朝鮮人青年たちの 148 人が裁かれ、そのうち、23 人に死刑が執行された。李氏は、刑死した同胞の苦悶を見知っている。「日本人戦犯の場合は自分の国のために死んでいくのだとまだ思えるだろうが、韓国人の場合はそういう気持ちさえ持てなかった。だれのために、何のために死ななければならなかったのか」と語っていた。彼は、死に至るまで、在日韓国人元 BC 級戦犯に対する謝罪と補償を叫び続け、新聞でもしばしば取り上げられていた。無念に刑死した同胞の叫びが心から離れず、また、命永らえた自分たちへの非情な対応に怒り心頭だったからである。

日韓議員連盟は特別給付金を支給する法案をまとめたが、成立していない。幹事長の河村建夫衆議院議員は「このままでは済まされるものではない」と言っている。BC 級戦犯問題の専門家であり、「同進会」を応援する会の代表の内海愛子・恵泉女学園大名誉教授は「李さんに事態は動いたと報告できる日が一日も早く来るように、遺志を引き継いでいきたい」と語っている。李氏らに多大な犠牲を強いながら、その犠牲に責任を負わないのなら、日本は世界に顔向けができない。日本国の倫理性が問われている問題である。